2010年　標準古典　レポート 2

古典の授業は、すべてプレゼンテーション形式で行うため、6 月 6 日のスクーリングから、原則、視聴覚教室で行います。

方丈記　鴨長明

『方丈記』（ほうじょうき）は、**鴨長明（かものちょうめい）**によって書かれた**中世文学の代表的な随筆。 吉田兼好の『徒然草』が書かれたのは、この後およそ 100 年後**である。**清少納言の『枕草子』**とあわせて**日本三大随筆**とも呼ばれる。なお、鴨長明には、他に、無名抄や発心集という作品もある。（レポート課題四　参考）

隠者文学（いんじゃぶんがく）とは

隠者文学とは、主に日本の中世において、俗世間から隠遁する道を選んだ者達（僧侶や隠者など）によって書かれた作品群の総称である。和歌、随筆、日記、文学とその形態はさまざまなものがある。「隠者文学」フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』より引用

「方丈記」冒頭

ユク河ノ流レハ絶エズシテ、シカモ、モトノ水ニアラズ。ヨドミニ浮カブウタカタハ、カツ消エ、カツ結ビテ、久シクトドマリタルタメシナシ。世ノ中ニアル人トスミカト、マタカクノゴトシ。（最古の写本は漢字カタカナ混じり文で書かれている。平安時代以降、男性は、カタカナを使用し、女性がひらがなを使用することが多かった。）

画像出典：IPA「教育用画像素材集サイト」 http://www2.edu.ipa.go.jp/gz/

意訳

ゆく河の流れは絶えることがなく、しかも、その水はもとのままの水ではない。淀みに浮かぶ泡は、一方で消え、一方で浮かび出て、長い時間この世にとどまっている例はない。世の中に存在する人間と、その住みかもまた泡と同じだ。

閑話休題１

仏教的無常観を、河の流れと時間とに重ねた文章。

ただし、水の流れを時の流れに重ね合わせることは、孔子が論語において、

子在川上曰　逝者如斯夫　不舎昼夜　（論語）

（先生が川のほとりに立って、言われた。過ぎゆくものはこのようであろうか。昼も夜も休むことなく、流れ去っている。）

と述べている。知識人である長明が論語の影響を受けた可能性はある。美空ひばりの「川の流れのように」（秋元康作詞・見岳章作曲）でも時の流れを河の流れにたとえているが、古典の世界と重ね合わせてみるのも面白い。

閑話休題２

鴨長明とはどんな人？

下鴨神社の神官である鴨氏に生まれ、和歌と音楽に優れた才能を持った人であったらしい。本来なら、その才能を生かして、それなりに出世コースを歩める人だった。出家遁世の理由は不明である。しかし、下鴨神社における神官への昇進がかなわなかったことも、その一因であると考えられている。

長明は、若い頃に、安元の大火（長明 22 歳）、治承の辻風（長明 25 歳）、福原遷都、養和、寿永の飢饉と疫病（長明 26 歳）、元暦の大地震（長明 30 歳）など五つの災害や動乱を経験している。この世のはかなさを身をもって知っていたからこその出家だったのかもしれない。

鴨長明が山科の日野山に支援者を得て、「方丈」を建て、住みついたのは１２０８年のことだった。その鴨長明が「方丈記」を書いたのは、１２１２年だったようだ。その後、 長明は１２１６年、６２歳で没した。

方丈とは

方丈とは、一辺が「一丈(約 3m)」の正方形。面積は 9 ㎡ (2.7 坪 5.4 畳)で、六畳間より少し小さい。柱間は 1.5m で、8 本の柱で構成され切妻の屋根を持つ。本体は組立式で、分解して荷車 2 台で運べる。4 面の壁面を構成する要素は、二種の開口部（上部ヒンジのしとみ戸×3 と柱間 1.5m の引違い戸×2）と、竹製の網代を表にした木製パネルである。

方丈は、留金で簡単に組み立てられる、いわばワンルームの仮設住宅である。

方丈レプリカは京都工芸繊維大学名誉教授の中村昌生氏の監修により、鴨川合坐小社宅神社（河合神社）に復元されている。

安元の大火（１１７７）

レポート課題　一

ものの心知れりしより

→私が、物事の道理をわきまえるようになったときから、

うつし心あらんや

→どうして生きた心地があろうか、全く生きた心地はしないだろう。

レポート課題　二　安元の大火における人的被害、焼失家屋および焼失範囲、財宝の被害、家畜の被害

予、ものの心を知れりしより、四十あまりの春秋を送れる間に、世の不思議を見ること、ややたびたびになりぬ。

いにし安元三年四月二十八日かとよ。風激しく吹きて、静かならざりし夜、戌の時ばかり、都の東南より火出で来て、西北に至る。果てには朱雀門・大極殿・大学寮・民部省などまで移りて、一夜のうちに塵灰となりにき。

火もとは、廛口富小路とかや。舞人を宿せる仮屋より出で来たりけるとなん。吹き迷ふ風に、とかく移りゆくほどに、扇を広げたるがごとく末広になりぬ。遠き家は煙にむせび、近きあたりはひたすら炎を地に吹きつけたり。空には灰を吹きたてたれば、火の光に映じて、あまねく紅なる中に、風に堪へず、吹き切られたる炎、飛ぶがごとくして、一、二町を越えつつ移りゆく。その中の人、うつし心あらんや。あるいは煙にむせびて倒れ臥し、あるいは炎にまぐれてたちまちに死ぬ。あるいは身一つ、からうじて逃るるも、資財を取り出づるに及ばず。**七珍万宝さながら灰燼となりにき。**その費え、いくそばくぞ。そのたび、公卿の家十六焼けたり。ましてそのほか、数へ知るに及ばず。すべて都のうち、三分が一に及べりとぞ。男女死ぬる者数十人、馬・牛のたぐひ辺際を知らず。

人の営み、みなおろかなる中に、さしもあやふき京中の家を作るとて、財を費やし、心を悩ますことは、すぐれてあぢきなくぞ侍る。

レポート課題三

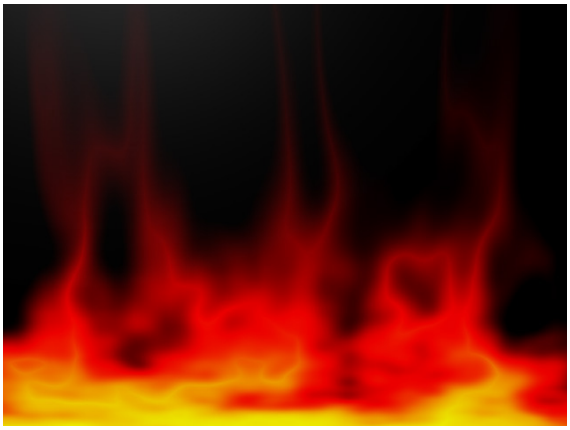
人の営み、みなおろかなる中に、さしもあやふき京中の家を作るとて、財を費やし、心を悩ますことは、すぐれてあぢきなくぞ侍る。

→人間のやることは、みなばかげたものであるが、その中で、それほどまで危険な都の中に家を作ろうとして、財産を費やし、心をあれこれと労することは、このうえなくつまらないことです。

閑話休題三

＊　音読して、リズミカルで、迫力ある描写を体感してみましょう。

吹き迷ふ風に（八音）、とかく移りゆくほどに（一一音）、扇を（四音）広げたるがごとく（九音）末広になりぬ（八音）。遠き家は（六音）煙にむせび（七音）、近きあたりは（七音）ひたすら炎を（八音）地に吹きつけたり（八音）。空には灰を（七音）吹きたてたれば（七音）、火の光に（六音）映じて（四音）、あまねく（四音）紅なる中に（九音）、風に堪へず（六音）、吹き切られたる炎（一〇音）、飛ぶがごとくして（八音）、一、二町を（七音）越えつつ（四音）移りゆく（五音）。



画像出典　http://free-cg.com/07-fire/fire-01.html

徒然草　公世の二世のせうとに

参考訳

公世の二位の兄で、良覚僧正と申し上げた方は、非常に怒りっぽい人であったそうだ。（この僧正の住んでいる）僧坊のそばに、大きな榎の木があったので、人々は、「榎の木の僧正」と呼んでいたそうだ。（僧正は）このあだ名は、ふさわしくないと言って、その木を切ってしまわれたそうだ。（ところが、）その根が残っていたので、（人々は）「きりくいの僧正」と言ったそうだ。（僧正は）ますます腹を立てて、切り株を掘り捨ててしまったところ、その跡が、大きな堀（のよう）であったので、（人々は）「堀池の僧正」と言ったそうだ。

（第四十五段）

レポート六

このお話のおもしろさはどこにあるとあなたは思いますか？本文を引用し、根拠をあげて、自分の意見を述べましょう。

＊評価の観点は、「自分の意見や考えたことが、自分の言葉でしっかりと書いてあるか。」につきます。国語の場合、自分の頭で考えたことや感じたことを、自分のことばで表現するということが大切です。ある文章を読み、文章を書くという行為によって、読解力、思考力と表現力が同時に向上します。臆せずにどんどん文章を書きましょう。

万葉集

レポート一

あかねさす　紫野行き標野行き　野守りは見ずや　君が袖振る　　額田王

茜さす（あかねさす）→日、昼、紫、照る、君　にかかる枕詞。この場合は、「紫」にかかります。

閑話休題

枕詞（まくらことば）とは、主に歌に見られる修辞。特定の語の前に置いて組となり、語調を整えたり、ある種の情緒を添える言葉のこと。多くは、五音からなります。歌の意味には直接関係がないことが多いのですが、そのことばの意味が歌そのものにイメージにおおきく影響を与えている場合もあります。恋人からティファニーのネックレスをもらうとき、ネックレス現物だけをぽんと手渡されるより、きれいな青い袋とリボンで包装された状態で貰う方が嬉しいですよね。ティファニーのブルーリボンにあたるものが「枕詞」です。「枕詞」や「序詞」と同じく、ことばの贈り物とでも考えてください。

例　垂乳根の（たらちねの）→母にかかる枕詞。

しかし、垂乳根とあるように、若々しいお母さんではなく、この場合は、老母や老親です。

紫の　にほへる妹を　憎くあらば人妻ゆゑに　我恋ひめやも　　大海人皇子

意訳「紫が匂うように美しいあなたを憎ければ、人妻と知りながらどうして恋しようか」

現在は天智天皇の妻である額田王に対して、歌をよんだ相手は、元夫の大海人皇子（おおあまのみこ、後の天武天皇）。

この大海人皇子は、天智天皇の実弟。そもそも、大海人皇子の妻であった額田王を、兄の天智天皇が妻にした。

薬草摘み、狩りの最中、人目のないところで偶然に出くわした二人。

「薬草摘みに紫野を、標野（しるしをした土地=禁足地）を私はやってきた。ああ、あなたが馬の上から袖を振ってラブコールをおくってくださる。でも、番人が見ていたら、どうしましょう」

「紫が匂うように美しいあなたを憎ければ、人妻と知りながらどうして恋しようか」

と歌い交わしたという。

閑話休題

今は天智天皇の妻となった元妻額田王と、元夫の大海人皇子。二人の関係を考えれば、さまざまな想像をめぐらすことができる。危険な恋の一コマか、あるいは、遊猟後の宴会

での天智天皇を前にして詠みかわした座興の歌か。真実はわかりません。

作家井上靖には『額田王』という小説があり、漫画家大和和紀には『天の果て地の限り』があります。また、里中満智子には『天上の虹』という作品があります。現代作家の作品を通して、万葉の時代に想いをはせてみませんか。

レポート三

にほ･ふ【匂】角川古語大辞典より

「に」は丹、「ほ」は秀（目立つもの）の意。もと、色･光彩が本体から発散し、照り映えるのをいう。嗅覚的な意味の用法は、上代には存否の確証がないが、平安時代には広く用いられており、のちには、視覚的な意味の「にほふ」をしのぐようになる。・ 動ハ四・自然界の現象として、あるいは草木などの染料によって、美麗な色彩･色調、光彩･光沢などが現れ出る。その本体であるものの、内なる精気や美質の発現ともいうべき感覚美である。「秋さればもみち葉尓保比(にほひ)（万葉･三九〇七）」のように色彩が主である場合もあれば、「朝日影尓保敝(にほへ)る山に（万葉･四九五）」のように光を主としていることもあるが、多くの場合は色彩と光輝とが分かちがたく感覚されている。その色彩は、総じて上代では、赤系統（赤･橙･黄）の明るい色調であることが多い。（中略） ・人間の身心の美的魅力についていう。・顔色や肌色が、輝くように美しい色つやを呈する。色白の顔が紅潮するのを「にほふ」といった表現が、平安時代の散文には多数見られる。上代では、このような肌色の美を表す「にほふ」は、「筑紫なる尓抱布(にほふ)児ゆゑに（万葉･三四二七）」をそれと解しても、希少例である。ただし、「紫草の尓保敝る妹（万葉･二一）」「山吹の尓保敝る妹（万葉･二七八六）」などの、掛詞による比喩の表現の数例は、この先駆と見られる。（後略）

レポート四　五

ぬかたのおおきみ　額田王

やまべのあかひと　山部赤人

おおとものやかもち　大伴家持

あずまうた　東歌

さきもりのうた　防人歌

やまのうえのおくら　山上憶良

おおあまのみこ　大海人皇子

画像出典：IPA「教育用画像素材集サイト」 http://www2.edu.ipa.go.jp/gz/

レポート六

そで振{ふ}る　角川古語大辞典より

着物の袖を振る。**古代では、袖や領巾(ひれ)を振ることは、鎮魂や悪霊を払い、身に近づけ**

たい霊魂を招き寄せる意味を持つ呪術的行為であった。それが、愛情や別れを惜しむ気持の表現としての意味をも持つようになる。「茜草指すむらさき野ゆき標野行き野守は見ずや君が袖布流(そでふる)」〔万葉・二〇〕

閑話休題　万葉歌人　山上憶良特集

山上憶良の歌は、子どものことを想った歌が特徴だと言われています。さらに、病気や貧乏など、人生の苦しい面や、その時代の問題を扱っていることも特筆すべきです。

山上憶良は、「貧窮問答歌」が有名です。その他にも、子どもを思った歌として、「宴を罷る歌」（憶良らは　今は罷らむ‥）などが有名ですが、心に突き刺さるように切なく悲しい歌（古日に恋ふる歌）もあります。この歌は愛児を亡くした時の歌ですが、今もなお、時を経て、その慟哭に涙せずにはいられません。

以下、山上憶良の歌を紹介します。

山上憶良、宴（うたげ）を罷（まか）る歌一首

憶良らは 今は罷（まか）らむ子泣くらむ それそのの母も 吾を待つらむぞ　（巻三、三三七）意訳　憶良はもう退出しよう。子供が泣いて待っていよう。その子の母も私を待っているだろう。

瓜食（は）めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲（しぬ）は ゆ いづくより 来たりしものぞ 眼交（まなか）ひに もとなかかりて 安寐（やすい）し寝（な）さぬ（巻五、八〇二）

意訳　瓜を食べれば子どもを思い出す。栗を食べればますます偲ばれる。どこから来たものか、子どもの面影が目の先にちらついて眠れそうもない。

銀（しろがね）も 金（くがね）も玉も 何せむに勝れる宝 子にしかめやも（巻五、八〇三）　意訳　白銀も黄金も宝玉も、そんなもの何になろうか、子どもには及ぶべくもない。

男子（をのこ）名は古日（ふるひ）に恋ふる歌三首

世の人の　貴（たふと）び願ふ 七種（ななくさ）の 宝も我れは 何せむに　我（わ）が中（なか）の　生れ出でたる　白玉の　我（あ）が子古日（ふるひ）は　明星（あかぼし）の　明くる朝（あした）は　敷栲（しきたへ）の　床（とこ）の辺（へ）去らず立てれども　居（ゐ）れども　ともに戯（たはぶ）れ　夕星（ゆふつづ）の　夕（ゆふへ）になれば　いざ寝よと　手をたづさはり　父母（ちちはは）も　うへはなさがり　さきくさの　中にを寝むと　愛（うつく）しく　しが語らへば

いつしかも　人と成り出でて　悪（あ）しけくも　善（よ）けくも見むと　大船（おおぶね）の　思ひ頼むに　思はぬに　横しま風の　にふふかに　覆ひ来（きた）れば　為（せ）むすべの　方便（たどき）を知らに　白栲（たへ）の　たすきを懸け　まそ鏡　手に取り持ちて　天つ神　仰ぎ祈（こ）ひ祷（の）み　国つ神　伏して額（ぬか）つき　かからずも　かかりも　神のまにまにと　立ちあざり　我（あ）れ祈（こ）ひ祷（の）めど　しましくも　よけくはなしに　やくやくに　かたちつくほり　朝な朝（さ）な　言ふこと止（や）み　たまきはる　命絶えぬれ　立ち踊り　足すり叫び　伏し仰ぎ　胸うち嘆き　手に持てる　我（あ）が児飛ばしつ　世間（よのなか）の道　（巻五、九〇四）

反歌

若ければ 道行き知らじ 幣（まひ）は為（せ）む 黄泉（したへ）の使（つかひ） 負ひて通らせ　（巻五、九〇五）

意訳

世間の人が貴び欲しがる七種の宝も、私には何の役にも立たない。

私たちの間に生れた古日は、明けの明星が輝く朝は寝床のそばで、立っていても座っていても、いっしょに戯れ、

宵の明星が輝く頃には、さあ寝なさいというと手を握って、父さん母さんそばを離れないでね。僕は　二人の真ん中で寝るんだよ。川の字になって寝ようと愛らしく言うから、

いつ大人になるんだろう、悪いことも良いことも見てやろうと楽しみにしていた時に、

思いがけず急に横風が吹きつけてきて、

どうしてよいかわからず、白妙のたすきをかけ、真澄みの鏡を持って天の神に祈り、地の神にぬかづき、病にかかるもかからぬも神様の思し召しと、立ち騒ぎ、祈ったけれど、

しばらくも良くはならずに、だんだん顔色も悪くなり、物も言わなくなって命が絶えてしまったから、

躍り上がったり、足摺りしたり、うつ伏し、天を仰いだりして、胸を叩いて嘆き、

掌中の宝珠である我が子の魂を鳥が飛ぶように私の手の中から飛ばしてしまった。

これが世間の道なのだろうか。

反歌　**まだ若くて、あの世への道も知らない者だから、贈り物をするから黄泉（よみ）の**

使いよ、どうか背負っていってください。